

〔當世武野俗談〕冬瓜仁右衛門

本所吉田町に御小性組御番衆兼松又四郎と申、御旗本衆の地を借りて、立派に普請をして住居し、大勢家來召仕、子分方多く有て、其土地は云ふに不及、吉原境町すべて慰所にて、悉く人に用ひられ、名を得たる所の仁右衛門といふもの有、かれが異名を冬瓜と呼、其根元は、此者本所邊旗本屋敷の中間奉公して居たりしが、瘡毒を煩ひ、中年より骨折奉公不成して、本所三ツ目通輕き御家人衆の寄合辻番の番人に入り、此もの辻番を又々出て、少々瘡毒本復して商をしけるに、西瓜のたち賣を思ひ付て、冬瓜のたち賣一文づゝ、裏店住居かるき人々の、一朝の汁の實と成程づつ賣ける、此たち賣大にはやり、わづか成事なれども、是に利を得て、少々元手つきけり、茲を以て今とても、冬瓜仁右衛門と呼ばれて、其名高きこと甚し、

〔嬉遊笑覽<sup>十</sup>上<sup>十</sup>〕卑うして便利なる物は、冬瓜のきり賣なり、武野俗談に、本所三ツ目寄合辻番のものに、仁右衛門といへる者、西瓜の裁賣より思ひ付て、冬瓜をたち賣にして、一錢づゝに裏屋の者に賣たり、大にはやりて、冬瓜仁右衛門と異名をとりしとなむ、これ元文寛保ごろの事なり、又或

人語りけるは、淺草瓦町に大和屋某といふ者、文魚とかいひて、人の知たる放蕩ものあり、その邊に冬瓜のきり賣來りければ、其荷へるを殘らず買ひていひけるやう、此邊にかゝる物もてくるは、土地の耻なり、重ねて賣に來ば、其儘にはおかじとて歸したりとかいとおこがまし、

瓜栽培

〔延喜式<sup>三十九</sup>内膳<sup>九</sup>〕耕種園圃

營早瓜二段、種子四合五勺、總單功卅六人、耕地二遍、把犁一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、堀畦溝三人、糞七十五擔、運功十二人半、位三百六十座、踏位一人、下子半人、<sup>二</sup>拂虫十二人、壅并芸三遍、第一遍五人、<sup>三</sup>三月第二遍四人、<sup>三</sup>三月第三遍三人、<sup>四</sup>月  
營晚瓜一段、種子四合五勺、總單功卅五人半、耕地二遍、把犁一人、馭牛一人、牛一頭、料理平和三人、堀